

白川研究所便り



在りし日の白川静先生（2005年5月24日、白川静記念東洋文字研究所にて）

目次 ◆ index

ご挨拶.....	2
立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について.....	3
白川静先生とその思い出.....	6
白川静博士没後十年企画 「白川静先生を語る会」.....	9
立命館土曜講座特集 「白川静先生の学問を顧みる —白川静先生の没後十周年を記念して—」の開催について.....	10
二〇一五年度国際シンポジウム.....	12
二〇一六年度国際シンポジウム 白川静博士没後十年企画「白川学の現在と展望」について.....	13
「連続公開講座」《白川文字学の原点に還る》報告.....	14
古代文字「白川フォント」無料公開.....	15
立命館の附属校で「第一回漢字教育公開研究会」.....	16
文化事業活動報告（二〇一五—二〇一六年度）.....	17
六年目を迎えた「漢字教育士」の活動.....	22
書籍紹介.....	24

第11号

発行

17.12.20

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8557 京都市北区等持院北町56-1

電話 075-466-3470

E-mail toyomoji@st.ritsumei.ac.jp

URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/>

KJRC/sio/index.html

杉橋 隆夫

上島 有

芳村 弘道

高島 敏夫

後藤 文男

久保 裕之

久保 裕之

ご挨拶

所長 杉橋 隆夫



二〇一六年十月三十日が白川静先生の没後正十年に当たるところから、当研究所では、関係各方面のご理解とご支援を得て、記念事業を実施すること

としました。予定の期間は二〇一六年十月から二〇一七年九月までの一年です。事業の詳細については、研究所のホームページや本誌、その他の媒体を参照いただくとして、概要は次の三本柱からなります。すなわち、①「白川文字学」の発信による東アジアにおける東洋文字文化研究の拠点化を目指すこと、②本学が独自に有する資源・コンテンツの社会還元をはかり、理解の深化と支持の拡大に努めること、③学内外の諸機関と連携しつつ「白川文字学」の普及と教育事業の推進をはかること、です。

白川博士の文化勲章受賞を記念して本研究所が開設され、盛大な式典が催されたのは二〇〇五年五月二十四日ですが、本誌の創刊号（二〇〇六年三月刊）の巻頭には、白川名誉研究所長や長田豊臣研究所長（立命館総長、当時）による挨拶

文が掲載されています。白川先生は研究所の開設に際して多額の運営資金を寄せられるとともに、様々な抱負を述べておられますし、先生自筆の「白川文字学研究所設立趣意書」他の書類も遺^{のこ}されています。しかし先生は、創刊号発行の半年後に九六歳で逝去されていますから、研究者としては生涯現役の大往生だったとしても、研究所の将来については少々気掛かりなところがあつたかも知れません。その後のわれわれが、どれほど先生のご遺志に報^{はなは}いたか、甚だ心許ない限りですが、前の挨拶文によると、現研究所はあくまでも「仮事務所」であり、「次年度早々に」も本格的な「研究所の設置場所」が決定されるものと期待されていたようです。

その意味で常置研究所化は、本研究所にとって開設以来の悲願だともいえます。先生没後十年を記念する本行事の遂行を通じて、学内外、広くは国内外のご理解を深め、協業の輪を広げつつ、常置研究所に移行・飛躍したいものと、所員・研究員、事務局一同決意を新たに希求するところであります。

立命館白川静記念

東洋文字文化賞の選考結果について

〈第十回〉二〇一六年度募集分

立命館白川静記念東洋文字文化賞大賞

上島 有

摂南大学名誉教授

受賞理由

上島氏は、京都府立総合資料館所蔵の「東寺百合文書」の整理とその研究に長く従事され、日本の中世古文書学・中世歴史研究に多くの業績を打ち立て、多大な貢献を果たされている。同氏は、これまでに『東寺・東寺文書の研究』（思文閣出版、一九九八）をもつて第二一回角川源義賞、また密教学芸賞を受け、^{しかい}斯界に^{かくかく}赫赫たる名声をすでに馳せておられるが、九〇歳をこえてなお大著『中世アーカイブズ序説』を世に問われ、古文書学に新しい方法を提唱する旺盛な研究を示された。長年に亘る古文書研究は、広く日本の学問世界のみならず、文字学においても敬意を表すべきものであると、高く評価する。



思文閣出版（2015年）

受賞者の声



東寺に伝来した平安時代から江戸初期に至る二万点・三万通の東寺百合文書を二二年間に亘り整理致しました。寺の宝庫に、五〇〇年〜一〇〇〇年間、手付かずで虫の食った状態のまま保管されていた文書の一つ一つ広げ、手探りで整理をし研究しました。その経験から、現在では、古文書を歴史の資料・意思伝達手段に限定せず、文字の形や、原文書そのものから様々な情報を引き出すアーカイブズという研究を行っています。

白川先生とは、民間団体「文字文化研究所」で共に理事の任に就きました。先生の文字を意思伝達の符号としてだけではなく、生きた「もの」として研究される研究方法の共通性から、大変話が通じました。今回、先生との不思議なご縁で立派な賞を頂けてありがたく思っております。

立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

富谷 至

京都大学人文科学研究所教授

受賞理由

富谷氏の主著『木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史』刊行の二〇〇三年当時、出土文献についての専門書は少なく、また体系的に論じる書はほとんどなかった。同書は、専門的な内容を含みながら、一般向けにわかりやすく解説され、難しい言葉にはルビや説明をつけるなどして読み易い。題名にある木簡・竹簡だけではなく紙以前の甲骨から紙への移行までを追って書かれており、多くの人への簡牘^{かんとく}、出土文献の知識の普及という点においては大変優れた書籍である。簡牘の内容が中

国西北辺境の漢代の行政文書と限定的ではあるが、これまでに無かった辞典であり、文字学のみならず行政史の研究の上でも高い価値を有するものである。

受賞者の声



中国法制史(刑罰・犯罪・法律)を研究しております。

白川先生の御研究は文字学・文学が主眼であり、俗的な問題には距離を置いていたと思います。しかし、御著書より文字の変化・漢字の意味・漢字の変遷の裏には社会の変遷があり、そこを洞察しなければいけないということとを学ばせていただき、私の歴史研究・制度史研究に反映させていただいております。

次に、今回、受賞の対象となった簡牘つまり木簡・竹簡の研究についてです。白川先生は書写材料として甲骨・金文を専らとされてきました。しかし、今回簡牘の研究をも評価していただいたことで、若い研究者にエールを送ることになると改めて感じました。どうもありがとうございました。



岩波書店 (2014年)

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

武内康則

京都大学白眉センター助教

受賞理由

武内氏は、契丹^{きったん}小字中の漢語軟口蓋音の音写を扱い、契丹語の軟口蓋音の一部を解明した。また、漢語史書における漢字による音写で記録された契丹語に着目し、契丹語の音声特徴、特に音素配列に関する重要な特徴を明らかにした。同氏の研究は一見オーソドックスな分析であるが、漢語音韻学・契丹文字、特に小字の構造・モンゴル諸語の音韻に精通し、データの丹念な検証なくしてはなしえないものといえる。契丹文字は使用された期間は短いものの、その研究はモンゴル諸語の古層^{りよう}、遼・契丹族の歴史と文化、疑似漢字の類型といった様々な研究に寄与する。若手ながら有意義な多くの論考を持つ研究は今後も斯界に貢献できるものと期待できる。

受賞者の声



私は一〇世紀―一二世紀の北中国で使用されていた契丹文字・契丹文字で記された契丹語の研究に携わっております。私のように、東洋の文字文化を研究している者にとっては、白川静記念東洋文字文化賞は憧れでありました。

契丹文字の研究は、歴史学や中国語の音韻史など様々な領域でインパクトを与えているといわれています。それは同時に、専門の言語学だけでなく、歴史学・考古学・中国語学など他の専門科学の知識や研究方法を知ることや、他の領域の研究者との連携が重要になってくるということだと思います。今回の受賞を励みに今後一層精進し、少しでも社会に貢献していきたいと思っております。このたびは誠にありがとうございました。



第10回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子
(2016年10月15日、立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎図書館カンファレンスルームにて)
前列右から二番目より武内康則氏、上島有氏、富谷至氏

委員
選考

委員長 杉橋 隆夫 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研

究所所長)

委員 加地 伸行 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研

究所研究顧問)

下中 美都 (株式会社平凡社代表取締役社長)

芳村 弘道 (立命館大学文学部 教授)

上野 隆三 (立命館大学文学部 教授)

萩原 正樹 (立命館大学文学部 教授)

第一回～第九回 立命館白川静記念東洋文字文化賞 受賞者一覧

回	賞 名	受 賞 者
第一回		沈慶昊 (韓国・高麗大学教授) 漢字字体規範データベース編纂委員会 (代表 石塚晴通 北海道大学名誉教授)
第二回		日本漢字教育振興協会 (代表 理事長 土屋秀宇)
第三回		エヴゲーニイ・イヴァノヴィチ・クチャーノフ (Ivanovskiy Evgeny Ivanovich) ロシア科学アカデミー東方学研究所 荒川慎太郎 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研 究所准教授)
第四回	奨励賞	該当者なし
第五回	教育普及賞	久米雅雄 (大阪芸術大学客員教授)
第六回	奨励賞	岡増裕剛 (北海道大学大学院文学研究科専門研究員)
第七回	教育普及賞	森岡隆 (筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)
第八回	教育普及賞	書論研究会 (代表 杉村邦彦)
第九回	奨励賞	蘇水 (北海道文教大学外国語学部教授)
第十回	奨励賞	山元宣宏 (宮崎大学教育学部専任講師)
第十一回	奨励賞	福井県立嶺北看護学校 (団体)
第十二回	奨励賞	張莉 (同志社女子大学現代社会学部准教授)
第十三回	奨励賞	該当者なし
第十四回	奨励賞	金成恩 (大韓民国全南大学校教授)
第十五回	奨励賞	張宇衛 (台湾中央研究院語言學研究所研究員)

※受賞者の所属・役職は受賞時のものである。

白川静先生とその思い出

上 島 有

(摂南大学 名誉教授)

一

この度、私は立命館大学白川静記念東洋文字文化賞大賞という非常に名誉な賞を頂戴致しました。私の仕事で、この賞に値するかどうかは、はなはだ心許ないことであります。しかし、私の学問が古文書学という文字に関する学問であることだけではなく、その方法論が、白川先生の文字学と共通するところが多い点をお認めいただいたのではないかと、有難く思っている次第であります。

それだけではありません。文字を通じて先生と私は不思議なご縁で結ばれていました。先生は、漢文学というか中国文学のご専攻。私は日本史学の専門で、とくに共通するところはありません。しかし、昭和六十二年(一九八七)、漢文学の権威中田勇次郎先生を所長にして、京都に設立された民間の研究団体の文字文化研究所で、はじめてお目にかかることになりました。私は、早くから旧京都府立総合資料館(現京都府立京都学・歴史館)所蔵の東寺百合文書の整理・研究に関係してきたこともあって、広く文字と関係があるからということで、役員の一人に名を連ねることになりました。白川先生も、この時同じく役員としてご一緒させていただきましたが、まだこの時には、余りお目にかかることはなかったように記憶しております。

後から考えますと、この時期が先生にとって、もともと学問的に充実した時期であつたのではないかと思います。昭和五十九年には『字統』を出版されます。ついで、同六十二年には『字訓』が刊行されました。そして、最後の『字通』をご執筆の時だつたと思います。時々、連絡に

先生のお宅に参上した所員の方から、先生は「今日は五枚書いた、昨日は七枚だつた」ということで原稿が、五〇センチから七〇センチになり、さらに一メートルをこえるようになっていったということを聞いたことを覚えております。

昭和の終わりから平成への時期といえますと、丁度パソコンが普及し始めた頃ですが、先生のお仕事はおそらくパソコンには馴染まな^{なじ}いことであつて、従来のまま、ペンで原稿用紙に向かっておられたのだらうと思います。原稿用紙が段々に積み上げられていくという快感というか達成感、私もついに経験したことのないものですが、一昔前の先学たちの何にも代えがたい喜びだつたのだらうと思います。『字統』『字訓』、そして『字通』が、このようにして出来上がったのだということで、先生のご苦勞に改めて思いを致します。



『字通』の印刷校正原稿と並ぶ白川先生

二

この三部作が、先生の畢生^{ひっせい}の大作であることはいうまでもありません。そのためには、執筆に没頭され、外部の研究会その他の役職などといったお断りになったと聞いています。私の記憶がいであなければ、文字文化研究所の役員会にも、余りご出席はなかったのではないかと思います。しかし、平成八年（一九九六）に『字通』が刊行され、先生の大きな肩の荷が下りた段階で、初代所長の中田勇次郎先生のご意向で、翌九年に二代目の所長にご就任、ここからこれまでの書齋一途の生活から一転した、新しい先生の活動がはじまります。

その年、早速先生を団長とする文化交流目的の訪中団が結成されます。これが、九〇年近く中国文学を研究されてきた先生の最初の中国訪問だったと聞いております。いかにも、研究一筋に歩んで来られた先生らしい話だと思います。この時、瀋陽において、二日間にわたって「日中合同文字文化研討会」がおこなわれました。日本側としては、白川先生をはじめ西夏文字の權威の西田龍男先生（京大名誉教授）など七名が報告、中国の四大博物館の一つ遼寧省博物館や北京大学の研究者と学問的交流をして、大きな成果を収めました。中国でも、先生の著書は注目されていて、多くの研究者は目を通しておりました。そして、先生の訪中をはじめですが、「百年の知己」のようで、初対面とは思えない交流が行われたと聞いております。

翌平成十年には、文化功労者として顕彰され、さらに平成十一年のはじめには、その祝賀会が催されました。もう、すっかり忘れてしまっておりましたが、この時、私が祝辞を申し上げたようです。今回、パソコンをひっくり返しておりましたら、偶然その時の草稿らしいものがでてきましたので、当時を思い出したような次第であります。

この年一月から、先生のご発案で「文字講話」がはじまりました。年四回、五年間、計二〇回という計画でした。この時、先生は八十九歳で

すが、それから五年間の講演会を計画されたのですから、その意気たるやまさに「壮」とすべきであろうと思います。岩倉の国立京都国際会館の大ホールが会場でしたが、毎回満員の盛況でした。何度かお話を伺いしましたが、内容は云々におよばず、声に張りがあり、二時間立ったままで、九十歳などとはまったく思えないお元氣さにはつくづくと感じ入ったことでした。学問に対する情熱のしからしめるものだと思われたいと思っております。

この間、『白川静著作集』（全一二巻）を刊行、先生の長い研究生生活の一応のまとめもおこなっておられます。「文字講話」が終わると、その講演内容は『白川静 文字講話』（全四巻）にまとめられました。しかし、さらに「文字講話」の要望が強かったので、改めて四回追加の講演が行われるという状態でした。

平成十六年には文化勲章をご受章、研究者としては最高の荣誉に輝くことになりました。これを受けて、立命館では、翌年立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所を設立、先生の荣誉をたたえとともに、東洋文字文化研究の中心拠点として活動することになりました。

平成十八年十月には、病気のためご入院、やがて九十六歳で逝去されます。その入院直前には、追加の「文字講話」をまとめた『白川静 続文字講話』の最終校正をすませたところだったと聞いております。生涯の課題の字書三部作を完成、一二巻の『白川静著作集』を刊行、遺著となった『白川静 続文字講話』の校正もすまされた後でのご逝去です。研究者として、これほど完璧な生涯を送られたのは珍しいのではなからうかと、同年配の私には羨ましいかぎりです。

三

以上、私が白川先生とお付き合いさせていただきました先生の最後一〇年ほどを回想してみました。繰り返しになりますが、研究者としての先生の集大成の時期であり、もっとも輝ける時期であったと思います。

先生が、所長になられてから、時々役員会の席でお話することがありました。もちろん、内容はすべて忘れてしまっていますが、ただ非常に話が噛み合って気持ちがよかったことだけが記憶として残っております。どうも、考え方に共通するところがあつたからではないかと考えています。

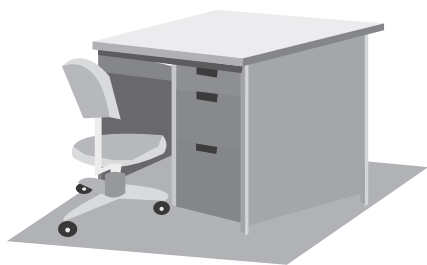
先生は、文字をたんに意志伝達の記号として考えるのではなく、一つひとつの文字に個性を認め、その意義を探究する学問を打ち立てられたと思います。白川文字学と称せられる所以^{ゆえん}です。たんなる符号・記号としての文字ではなく、個性ある「もの」としての文字の研究といえるかと思っています。

私は、縁があつて、わが国最大の古文書で、ユネスコの世界記憶遺産（世界の記憶）に登録されている東寺百合文書の整理・研究にたずさわることができました。これは、ほぼ中世のありし日の姿をそのまま伝えるものであります。文書の内容によつて、まず書き方がちがいます。使っている紙（料紙）もちがっています。包み方や封の仕方もちがっております等々のことに気付きました。そして、これら一つひとつが、貴重な文化情報であります。個性ある「もの」としての文書ということができるかと思っています。

これまでのわが国の古文書学や歴史学では、これらの貴重な情報を全部捨象して、たんに意思伝達の手段としての文書、すなわちただ歴史叙述の史料として研究してただけにすぎません。これでは、余りにも「勿体ない^{もったい}」といっております。私は、これを「もの」としての古文書学といっております。「もの」としての文書には、意思伝達の手段とい

うだけではなく、その作成から現在にいたるまでの長い歴史に裏付けられた、まだ未知ではありますが無限とも云うべき貴重な情報が秘められております。現在では、まだまったくその点に気付いておりませんが、それを歴史叙述の史料としてだけではなく、広く文化情報資源として活用しようではないかというたんでもないことを考えております。

白川先生は、文字をたんに意思伝達の記号としてではなく、個性ある「もの」としての文字学を確立されました。私は、文書をたんに意思伝達の手段としてだけではなく、個性ある「もの」としての古文書学を提唱しておりますが、まだまだ「茨の道」が続いております。しかし、文字なり文書なりを生きた一つの「もの」として研究の対象とするという点は、従来の研究方法とはちがったまったく新しい研究分野で、両者共通するものではないかと考えております。この受賞を機に、先生にならって一歩でも前に進みたいと考えております。



「平井嘉一郎記念図書館」開館記念事業
白川静博士没後十年企画

「白川静先生を語る会」

二〇一六年一〇月一五日、立命館大学衣笠キャンパスにおいて「白川静先生を語る会」が開催されました。在りし日の白川先生を偲ぶ。語る会は、本研究所副所長の芳村弘道（文学部教授）の司会により、白川先生のご長女である津崎史氏、『白川静の世界』（平凡社）の編者をされた西川照子氏にお話をいただきました。

先生が、若い頃から短歌を詠まれていたこと。相手の方を大切にされ、その方の興味関心にあわせて研究内容などについて話されたこと。中国詩と日本文学との対比を欠かさず、批評だけではなく自分で作ってみること、つまり作品制作の立場から文学を考えなければならぬと教えられたこと。洒落しゃれが大好きだったこと。『字通』の編集の際には、日本・中国の漢字字典二〇冊程から、その文字が古字書のどの頁に載っているかという一覧表を作成し、語彙の文例を探す作業のお手伝いをしたこと。などの貴重なお話をいただきました。

更に、津崎氏には、先生が甲骨文やト文ぼぶんをトレースされる際に使われていた丸ペンをご持参いただいたり、先生が立命館の広小路学舎で研究をされていた頃、大学で単語カードのような小さい紙に一文字ずつ文字を書き、夜十時頃帰宅され、帰宅後は文字の書かれたカードを分類するといった日々の研究・生活スタイルについてもご紹介いただきました。このように語る会では、白川先生の学問や研究についての思い出が語り合われ、資料だけでは見えなかった先生のお人柄について語られました。

今回の内容は、白川静先生没後一〇年記念として、二〇一七年の白川先生の忌日に合わせ一〇月三〇日に刊行された（編集・当研究所、発行

所・エディシオン・アルシヴ）。

また、平井嘉一郎記念図書館では、開館記念行事として、白川先生の学問の歩みとお人柄を回顧する特別展示を開催し、多くの方にご来館いただきました。

【展示概要紹介】

平井嘉一郎記念図書館開館記念行事企画

「白川静文庫」特別展示 ―白川静の世界―

白川静先生は、「東洋の精神」を求め、中国と日本の古代学など広範な学問領域を包括する「白川学」と世に呼ばれる学問世界を築かれました。今回は、その博大な学問のごく

一端を紹介しました。「白川静文庫」所蔵の先生の御手稿を軸とする展示を地階の貴重書庫前に行いました。

また、海外の学者との御交流うかがを窺い知る書籍や善本も出陳しました。一階ギャラリーには、白川静先生のご遺族から、先生の意外な一面を知る御愛用品などを拝借して、先生の在りし日を偲ぶ展示ができました。このほか白川静記念東洋文字文化研究所が所蔵する故欧陽可亮氏の書作品・愛用印、白川静先生お手製のブックカバーを施した書籍なども展示しました（二〇一六年一〇月一五日～三十日）。



立命館土曜講座特集

「白川静先生の学問を顧みる」

——白川静先生の没後十周年を記念して——の開催について

副所長 芳村 弘道

二〇一六年は、本学名誉教授・白川静先生（一九一〇—二〇〇六）の没後十周年にあたります。当研究所ではこれを記念して六月に土曜講座「白川静先生の学問を顧みる——白川静先生の没後十周年を記念して——」を開催しました。白川静先生の学問は、その死後も益々輝きを放ち、東洋の未来を照射しています。立命館大学衣笠キャンパスに四月開館した平井嘉一郎記念図書館では白川静文庫の一部分が開架されました。本講座では、白川静文庫を通して先生の学問を振り返るとともに、中国の研究者に与えた影響について解説しました。六月十一日（土）、十八日（土）の二回に亘って行われた本講座は二〇〇名前後の受講生が来場され、先生の学問への関心の高さをあらためて感じさせられました。以下にそれぞれの講演の概要と受講生の声の一部を紹介し、立命館土曜講座特集「白川静先生の学問を顧みる——白川静先生の没後十周年を記念して——」開催の報告とします。

◆白川静文庫の書籍・資料を通して知る白川学の世界（六月十一日）

立命館大学文学部教授 芳村弘道

二〇一六年十月で白川静先生が逝去されてから十年になります。立命館の卒業生であり、また戦前より長く本学園で教鞭を執られた白川先生は、漢字研究および中国の古典文学・思想・歴史、さらに日本の古代文

化など広範囲の領域で独自の優れた業績を示され、二〇〇四年に文化勲章を受章されたほか、多くの榮譽を受けられました。二〇〇五年に立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が設立される際、白川先生は御所蔵の書籍・資料の一部分を研究所に寄贈され、週のうち幾日かは研究所で研究・執筆することを計画されましたが、残念ながら実現成らず長逝されました。御遺蔵の書籍・資料が御遺族の芳志により本学図書館に寄贈され、御生前の寄贈書と合わせて、二〇一〇年に「白川静文庫」が設立されました。二〇一六年四月には、平井嘉一郎記念図書館の開館に合わせ、文庫の書籍を一部分、開架して利用に供する特別室が館内に設けられました。一万七千件に及ぼんとする文庫の所蔵には、白川先生自筆の原稿・甲骨文トレース・研究ノートなども多く含まれております。今回、「白川静文庫」のこうした貴重資料と書籍を紹介しつつ、白川先生の学問を解説して偉大な御業績を振り返りました。

○受講者の声（一部）

・ 視点を変えて整理された白川学の紹介で、大変良い内容でした。
 ありがとうございます。

・ 白川先生の直筆の資料を多数見ることができてよかったと思います。中国の古代文字だけではなく国字、万葉集など幅広い研究をさ
 れていたのも新しい発見でした。

◆中国からみた白川文字学（六月十八日）

大阪教育大学教育学部特任准教授 張莉

私は日本に来て今年でちょうど二〇年になります。日本に来てからは、しばらく書道や書論を勉強していましたが、そのうち漢字学を学ぶようになり、やがて白川静博士の文字学に出会いました。最初は、中国の文字学者の本を読んでいたのですが、白川文字学に出会い、字源に対する多くの疑問が解けました。ところが、中国ではまだ白川文字学につ



○ 受講者の声 (一部)

いてその学術的成果が十分理解されているとは言い難い状況です。それで、『白川文字学の精華』を中国で出版することを思いついたわけです。これらの翻訳を通じて白川文字学の正しい評価をしてほしいという願いがありました。白川文字学には、未来を開く文字学の方法論を多く含んでいます。これらを中国の方に理解していただければ、中国の文字学も飛躍的に進化するはずです。今回の講座では、中国の文字学の現状と中国の文字学者が白川文字学をどのように理解しているかについて、また、白川博士の「民俗学的方法」を用いて、古代中国の民俗と文字とのつながりを検証します。西双版納のハニ族やタイ族の生活は、古代中国の習慣を多く残しています。彼らの習慣には漢字との接点があります。それらについて言及してみたいと思います。

- ・ 白川先生の文字学を中国の学会で発表されていて、大変頼もしく思います。
- ・ 雲南省の少数民族で日本文化とよく似た生活をしていることを初め



て知りビックリしました。
非常に勉強になりました。

二〇一五年度国際シンポジウム

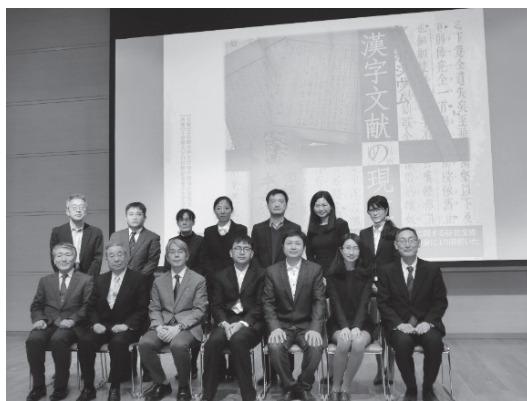
二〇一五年一月二八日、立命館大学衣笠キャンパスにおいて、国際シンポジウム「漢字文献の現在」が開催されました。

本シンポジウムは、立命館大学中国芸文研究会との共催で行われました。中国芸文研究会は、一九八二年に白川静先生を顧問として発足し、機関紙『学林』を発行してきました。二〇一五年は、『学林』が節目の第六十号を迎え、また、白川先生の生誕一〇五周年に当たる年となるため、今回のシンポジウムが企画されました。

中国を中心とする漢字文化圏内においては、まさに無数の漢字文献がこれまで産み出されてきました。それらは、鈔本や刊本のかたちで伝わり、歴代の学者や読者によって多くの研究や鑑賞がなされ、東アジアの重厚な文化を形成しています。さらに二〇世紀以降は、甲骨片や敦煌文書の発見が学界に大きな衝撃を与え、また近年では簡牘などの出土文献も加わって、漢字文献は多様な様相を呈しています。本シンポジウムでは、それら多様な漢字文献からいくつかを取り上げて、その歴史的・今日的な意義やさまざまな研究への活用について考察し、漢字文献研究の深化を図っています。

中国からは、簡牘・文献学・古代文学の専門家である首都師範大学歴史学院講師の田天氏、復旦大学中華古籍保護研究院中心副研究館員の王亮氏、東北大学秦皇島分校講師の張立克氏を、国内からは、五山文学研究の専門家である慶応義塾大学附属研究所斯道文庫教授の住吉朋彦氏をお招きし、活発な意見交換がなされました。

講演については、中国語の原稿を日本語に翻訳し、『学林』第六十二号に掲載し、成果を広く日本の研究者に紹介しました。



※本シンポジウムは橋本循記念会「研究交流活動助成」の助成金を受けております。



二〇一六年度国際シンポジウム 白川静博士没後十年企画 「白川学の現在と展望」について

二〇一六年二月三日、立命館大学衣笠キャンパスにおいて、国際シンポジウム「白川学の現在と展望」が開催されました。

故白川静博士（立命館大学名誉教授）の学問は「白川学」と総称され、さまざまな学問的影響を各分野に与え続けています。本シンポジウムでは、漢字文化圏の各国から臧克和（華東師範大学・世界漢字学会会長、中国）、張宇衡（中央研究院、台湾）、魯耀翰（高麗大学、韓国）、張莉（大阪教育大学、日本）の四氏をパネラーとして招き、国際的な視点から各国における「白川学」の受容の歴史と現状について語って頂き、さらに今後の学問の展開に「白川学」がどのような役割を果たしていけるのかという点について考察しました。

臧克和氏は「白川学研究についての管見」、張宇衡氏は「台湾における白川文字学の受容の過去と現在」、魯耀翰氏は「白川先生の興研究と杜律虞註の興説」、張莉氏は「中国に伝えたい白川静文字学」について、日本語と中国語で発表され、日本語・中国語・韓国語での同時通訳も行われました。質疑応答の際には様々な質問が出され、活発な意見交換がなされました。

当日は研究者や一般市民など百名余りが会場に集まり、各氏の講演に熱心に耳を傾け、活発な議論がなされました。

講演については、『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第十号に掲載されています。

※本シンポジウムは橋本循記念会「研究交流活動助成」の助成金を受けております。



「連続公開講座」

《白川文字学の原点に還る》報告

客員研究員 高島 敏夫



白川先生がお亡くなりになって早十年。だが、私自身が甲骨文や金文を用いた研究が続けている関係で、先生のお顔が浮かばない日がない。あのたたずまい、語り口、そして文章。とりわけ先生の文章を目の前にすると、そこから先生の姿が立ち上ってくるような不思議な感覚になる。それにしても膨大な仕事を残されたものである。この道を専門にしている者でも一通り読むには膨大な時間を要する。しかも読んでおかないと損をするような重要な仕事ばかりである。だがどれだけの人が先生の書かれたものを読みこなしているだろう。先生がお亡くなりになってから、そういう思いが日増しに強くなってきた。

先生の最初の一般書は六十歳の時に出された『漢字』（岩波新書）である。それ以降非常に精力的に文字学や文学方面の一般書を刊行されたのは周知の通りである。これらの書物はそれ以前にお書きになった膨大な学術論文を土台にしたものであるが、一般書という小さな紙面を使って書かねばならなかったために、学問

的な論証を随分省略されている。致し方のないことではあるが、そのために学術論文を読まない人からは誤解されることが少なくない。研究者と一般読者とを問わず、学問としての白川文字学の本当の姿を知っている人が非常に少ないということを何度も痛感させられたものである。

白川文字学の原点は『甲骨金文学論叢』という直筆の油印による論文集である。これが著作集別巻に三冊仕立てで完結したのが、先生の没後六年の二〇一二年のことであった。今回の刊行に際しては、引用される甲骨文や金文に全て先生御自身による書き下し文が付けられ、随分読みやすくなっている。ただそれでも専門外の人がこの論文集に素手で立ち向かうには少々手強いものがある。そうした人たちの手助けができればと考えて、連続公開講座を企画した次第である。テキストは拙著『白川文字学の原点に還る——「甲骨金文学論叢」を読む』（朋友書店 二〇一六年）を用いた。

実施内容は没後十年記念の行事として別に記されたように、二〇一六年十一月五日（土）から十二月十日（土）までの毎週土曜日の午前中に、末川記念会館の講義室で実施した。

全六回のうち、第五回までは《白川文字学の原点に還る》で白川文字学の理解を深めていただく内容。最終回は白川文字学第二世代としての私が展開しつつある内容についてお聞きいただく時間として設定した。これに当たったテキストが拙著『甲骨文の誕生 原論』（人文書院 二〇一五年）である。全六回で二冊もののテキストを使うのは受講する方々に少なからぬ負担をかけることになってしまい、反省することしきりであるが、六回の全てに出席された方が多く、終始熱心に耳を傾けておられた。白川文字学への理解が深まったという手応えを感じて頂けたのであろうか、回を追うにつれて会場の雰囲気次第に熱を帯びてくるような感触を得て、私にとっても非常に充実した時間を過ごせたような気がした。

古代文字「白川フォント」 無料公開

甲骨・金文などの古代文字の簡単検索で漢字教育のさらなる
深化・ひろがりを目指す

二〇一六年十二月七日、立命館大学衣笠キャンパスカンファレンス
ルームにおいて古代文字「白川フォント」のウェブ上検索システムの無
料公開について発表いたしました。当日は「白川フォント」のインスト
ール方法や検索システムの概要などのデモンストレーションが行われ、活
発な質疑応答がなされました。

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所は、白川静先生の没後十年
記念事業の一つとして、漢字を現代の書体（楷書）から古い書体（甲骨
文・金文・篆文）（以下、古代文字）に変換し、自由に使用できる「白
川フォント」の検索システムを開発し、そのWebをインターネット上
で無料公開しました。これにより、常用・人名漢字の古代文字約四千字
が検索可能となり、これほどの規模の古代文字の無料公開は日本では初
めてです。

本学の卒業生であり、戦前より長く本学で教鞭をとってきた白川静博
士は、漢字研究および中国の古典文学・思想、歴史、さらに日本の古代
文化など広範囲の領域で独自の業績を示し、二〇〇四年に文化勲章を受
章しました。白川静博士の学問は「白川学」と総称され、さまざまな学
問的影響を与え続けています。

本研究所では、白川静博士の研究を継承し、広く伝えるツールとし
て、博士が『漢字類編』（木耳社）、『字通』、『常用字解』（株式会社平凡
社）などに収録した古代文字をもとに、本学情報理工学部デジタル図書

館研究室と共同してフォント化しました。今回の「白川フォント」の公
開により、現代の文字を一度に古代文字に変換できるようになり、これ
までコンピューター上での利用が困難であった甲骨・金文などの文字
を、一般的なワードやエクセルなどの文書作成ソフトで簡単に利用でき
るようになりました。PDFやアートとしても使用できるようになる他、
古代文字をより身近なものに、また白川文字学に関わる研究や教育現場
での教材作成など漢字教育にも広く活用されることが期待されます。
今回公開するWebは暫定版であり、今後収録文字数や書体の拡充等
を行っていきます。

立命館大学

甲骨 約3300年前

𠂇 𠂇

金文 約3000年前

𠂇 𠂇

篆文 約2200年前

立 命 館 大 学

白川文字文化研究所

甲骨 約3300年前

𠂇 𠂇

金文 約3000年前

白 川 文 字 文 化 所

篆文 約2200年前

白 川 文 字 文 化 研 究 所

立命館の附属校で

「第一回漢字教育公開研究会」

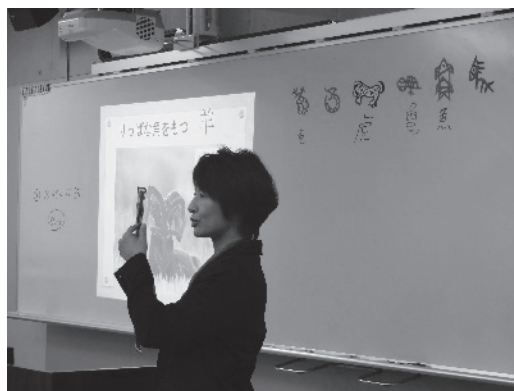
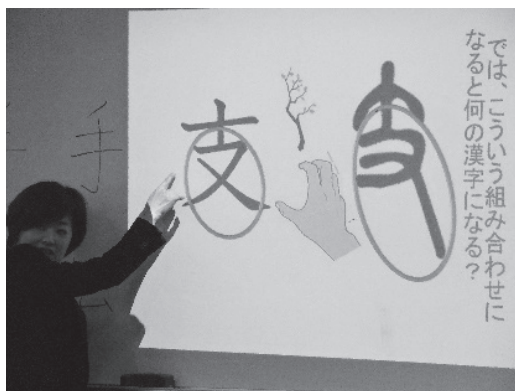
研究員 後藤 文男

二〇一六年十一月十九日（土）、立命館中学校・高等学校にて「第一回漢字教育公開研究会」が開催されました。立命館大学名誉教授白川静先生没後十年企画として、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と立命館の附属校教員による「白川式漢字学習法開発ワーキンググループ」が主催したものです。今回、立命館の附属校では初めての小・中・高同時公開の教育研究会となりました。

当日は立命館小学校六年生、中学校一、二年生、高校一、三年生の十クラスの児童・生徒たちが漢字学習の授業を受けました。白川文字学の実践が進んでいる福井県から、東郷小（当時）の蓑輪潤子先生と教育庁の竹内恵美子先生をお招きし、蓑輪先生には「古代文字動物園をつくらう!」、竹内先生には「子は宝」というタイトルで古代文字を活用した授業をしていただきました。各附属校の先生方も「ICT」を用いた授業やトレース体験を組み入れた授業、風呂敷から漢字を考える授業、絵本から広げる漢字の授業等個性豊かな授業を公開していただきました。これまでとは一味違う漢字の授業を受ける児童・生徒たちの驚きに満ちた笑顔が印象的でした。

午後からの意見交流会では「漢字の成り立ちを知ること、機械的に漢字を覚えるよりずっと心に残る知識になるのではないか」といった意見があり、白川文字学をもとにした漢字教育の新たな可能性を感じさせる授業公開となりました。最後に全体会では、白川静先生のご長女津崎史さんに『素顔の白川静』というタイトルで、貴重なお話をいただきました、大変充実した会となりました。参加された皆さん、本当にありがと

うございました。





2015年6月 京都漢字探検隊「植物と漢字」



2015年8月 北海道漢字探検隊「漢字ジェスチャー大会」

文化事業活動報告

(二〇一五―二〇一六年度)

文化事業担当職員 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年三月より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのものをテーマとして、座学だけではなく、見字や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。これまでの開催回数は一六〇回を突破した。二〇一五年度は新たな開催地として北海道が加わり、この二年間では全国八道府県で二三回開催され、延べ約二五〇〇名の参加があった。

北海道	福島				茨城			兵庫			大阪	滋賀				京都							地域
1	10	9	8	7	16	15	14	3	2	1	1	12	11	10	9	49	48	47	46	45	44	43	回
2015・8	2016・10	2015・9	2015・9	2015・9	2016・9	2016・7	2016・1	2017・2	2016・11	2016・7	2015・12	2016・12	2016・6	2015・11	2015・6	2017・3	2016・11	2016・6	2016・2	2015・11	2015・10	2015・6	実施年月
人体			建物		生活	植物	人体	動物	建物	人体	人体		数	篆刻		器物・文具・	篆刻			篆刻	動物	植物	テーマ
漢字ジェスチャー大会	漢字あそび大会	漢字あそび大会イン福島	鶴ヶ城で漢字と出会う	漢字あそび大会 イン喜多方	太古の昔からある漢字の 秘密を探れ	植物と漢字	漢字ジェスチャー大会	動物園で漢字と出会う	姫路城で漢字と出会う	漢字ジェスチャー大会	漢字ジェスチャー大会	漢字あそび大会	数と漢字	はんこを作ってみよう	イン草津	学校で漢字を見つけよう	はんこを作ってみよう	体験・福井の漢字学習	漢字あそび大会2016	はんこを作ってみよう	動物園で漢字と出会う	植物園で漢字と出会う	講座名
86	270	340	63	248	50	50	60	107	86	104	80	100	145	57	111	72	58	118	178	83	62	49	参加者数
札幌市民ホール	こむこむ館	こむこむ館	会津若松市文化センター・鶴ヶ城	喜多方蔵の里	上高津貝塚ふるさと歴史の広場	筑波実験植物園	つくばサイエンスインフォメーションセンター	姫路市立動物園	姫路市市民会館・姫路城	姫路市市民会館	大阪初芝学園	草津市市民交流プラザ	草津市市民交流プラザ	草津市市民交流センター	草津市市民交流センター	京都市学校歴史博物館	立命館朱雀キャンパス	立命館衣笠キャンパス	立命館朱雀キャンパス	立命館朱雀キャンパス	京都市動物園	京都府立植物園	場所



2015年11月 京都漢字探検隊「はんこを作ってみよう」



2015年9月 つくば漢字探検隊（上高津貝塚）



2016年2月 京都漢字探検隊「漢字あそび大会」



2015年10月 京都漢字探検隊「動物園で漢字と出会う」



2016年11月 姫路漢字探検隊「お城と漢字」



2016年6月 京都漢字探検隊「体験福井の漢字学習」



2017年2月 姫路漢字探検隊「動物園で漢字と出会う」



2017年3月 京都漢字探検隊「学校で漢字をみつけよう」

各地の開催では漢字を楽しむ会 遊（茨城県つくば市）、北海道漢字同好会、石川漢字友の会などの団体や各地の漢字教育士の協力を頂いている。二〇一六年度は兵庫県姫路市で年間三回の講座を開催し、各回とも多くの参加者があった。

学内他組織との連携事業

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ（詳細は別稿に）も三年目を迎え、その業務の一環として附属校でのミニ「白川静」展や出張講義を行った。また提携関係にある大阪初芝学園とも連携して、小学生対象の「漢字探検隊」の開催や中学校での出張授業、一般を対象とした「白川静展」を開催した。

本学広報課と史資料センターとの協力により二〇一六年三月には『立命館人物伝 東洋の復活 白川静 漢字の世界の新しいとびらを開いたものがたり』を刊行、配布を始めた（家の光出版『ちやぐりん』二〇一五年四月号「いのちの歴史 白川静」の再編集、単冊化）。これは白川先生の生涯と白川学の内容を漫画で表現したものであり、本来の対象とした小学生だけでなく、幅広い層から好評を博している。

二〇一六年四月に本学衣笠キャンパスに新築された平井嘉一郎記念図書館内に「白川静文庫」が開設されたことと、白川先生の逝去一〇年とを記念して、同年九月から一〇月にかけて本学図書館と連携で衣笠キャンパスと大阪いばらきキャンパスとで「白川静展」が開催された。また、国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日特別企画」も引き続き開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。



2015年11月 初芝立命館での白川静展



2015年8月 白川静展 立命館慶祥中学校・高等学校



2015年12月 初芝立命館中学での特別授業

二〇一六年八月には本学の衣笠キャンパスでのオープンキャンパスに出展。「白川静展」や漢字クイズ、来場者の名前を古代文字で書いた短冊の贈呈、キャンパス内での「古代文字ラリー」を開催し、「立命館の漢字、白川静」を本学に関心を寄せる高校生や保護者にも知っていただく機会となった。

校友会との関係では、二〇一五年七月の「香川県校友会」に招かれ講演を行ったほか、二〇一六年一〇月に金沢で開催した「オール立命館全国校友大会」にも出展した。



2016年8月 立命館大学オープンキャンパス（衣笠）



2016年8月 立命館大学オープンキャンパス（衣笠）

他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、五〇〇名を超える「漢字教育士」の重要な輩出元となっている。二〇一六年六月に開設された「漢検 漢字博物館・図書館（漢字ミュージアム）」において二〇一六年一〇月から二〇一七年三月まで「漢字教室」を開催した。

放送大学大阪学習センター（大阪市）では同校の面接授業に「漢字学」を開講、八科目を修了すると「漢字教育士」資格が取得できる。

北國新聞文化センター（石川県金沢市）とは、二〇一六年一〇月から一月にかけての「白川静展」や「漢字探検隊」の開催に際して協力を受けた。

このほか、摩気高山こども未来塾（京都府南丹市）の出張講座に招かれ、またハルカス大学（大阪市）との連携で「漢字教育士資格認定講座」を開催した。

自治体との関わり

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内に拠点を設け、研修や学習会が開催されている。この取組はさらに中学・高校教育の領域へ広がりを見せている。白川研からは、生涯学習の分野で福井ライフ・アカデミー主催の漢字文化講座への講師を派遣した。また白川先生没後十年記念の企画は福井県でも盛大に催され、二〇一六年九月には、「ふくい南青山291（東京都港区）」での「白川静展」の開催、一〇月には福井市での「白川静漢字ワールド」の出演、福井県立図書館「白川静文庫」のリニューアル開設のほか、白川研主催の「漢字教育士研修会」や「漢字探検隊」への講師派遣を受けるなど緊密な関係が続いている。

本学びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学校にて漢字・計算・英語の三検定の受検に取り組むようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、草津市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が二〇一一年度から始まり、年二回の開催も定例化している。二〇一五年二月には市立山田小学校の出張講義に招かれた。

兵庫県朝来市和田山公民館での市民講座は二〇一一年度から始まり、五年目を迎えた。五月から一月まで連続開催され、座学の他に同年一月には受講生が京都まで遠征、二条城と「漢字ミュージアム」で「漢字探検隊」を受講した。二〇一五年一月には京都府宇治市（三回）、二〇一六年には京都府京丹後市（六回）、大阪府河内長野市（三回）、滋賀県甲賀市（一回）の市民講座に招かれた。

新しい動きとしては、兵庫県姫路市との関係が挙げられる。立命館大学と姫路市との間でも教育研究連携に関する協定を締結しており、それに基づき姫路市生涯学習大学校において二〇一五年一月から二月まで五回の講座を開催したところ定員を大幅に上回る応募者があった。二〇一六年度からは本科として二年間の講座（第一期）を開講し、これにも応募が殺到した。この講座では「漢字教育士」の課程を行っており、修了後の二〇一八年度には多くの漢字教育士が姫路地区に誕生することが期待される。二〇一七年度開始の第二期の開講も決定した。上述の姫路市での「漢字探検隊」の連続開催はこの状況に対応するものであり、姫路地区における市民の漢字文化への意識の高まりに資するものになれば幸いである。



2016年9月 白川静展（東京）



2016年6月 草津漢字探検隊「数と漢字」

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行おうとする試みである。二〇一一年一〇月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、その後岩手県大船渡市での「漢字あそび大会」を開催した。二〇一五年は「漢



2015年9月 福島漢字探検隊「漢字あそび大会イン喜多方」



2015年9月 福島漢字探検隊「鶴ヶ城で漢字と出会う」

字のまち」福島県喜多方市との交流も始まり、同年一〇月には喜多方市・蔵の里での「漢字あそび大会」、鶴ヶ城（会津若松市）での「漢字探検隊―お城と漢字」、福島市・子どもの夢を育む施設こむこむでの「漢字あそび大会」を開催した。二〇一六年度は喜多方市立第二小学校への出張授業と福島市・こむこむ館での「漢字あそび大会」を開催した。こむこむ館へは福島市だけでなく、周辺自治体からの参加者も増えている。福島県での活動では、福島大学・澁澤尚研究室の協力を仰いでいる。

また宮城県では、文化教育サポーターズの協力を受け、角田市立角田小学校・枝野小学校・西根小学校、蔵王町立遠刈田小学校、山元町立こどもセンターへの訪問授業を行った。

六年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当職員 久保 裕之

二〇一一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる六年が経過し、今では資格認定者が五〇〇名を数えるようになりました。

「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女かわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある人気科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も五名いらっしゃいます。また姫路市生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。現在第一期生・七〇名の方が対面講座で学んでおり、二〇一七年度にも第二期生七〇名が学んでいます。いずれも定員を大きく超える志願者がありました。

ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。時間的・空間的制限がないのでどな

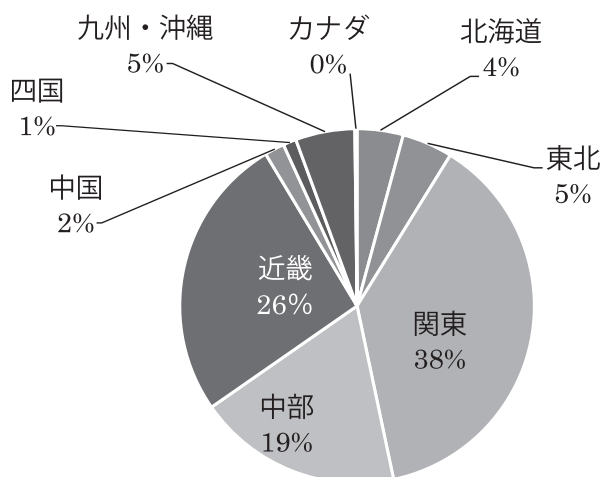
たでも受講でき、日本国内はもとより、海外在住の日本人・外国人の受講も増えています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな効果を上げています。漢検協会は漢検受験で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、一級・準一級合格者からなる「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年一〇〇名ほどの方が選抜されて本講座を受講しています。二〇一七年一月をもって第五期の受講が修了、四月からは第六期の受講が始まり、二〇一八年三月まで実施されます。

漢字教育士は二〇一七年二月末現在五一八名で、その活動拠点は全国そして海外に広がっています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静博士と武田鉄矢氏）と特別認定者一七名、課程修了による認定者四九九名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は左の表の通りです。

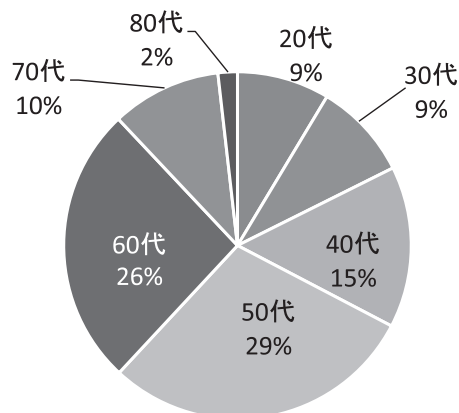


2015年8月 漢字教育士研修会（大阪）

地方別統計



年代別統計



書籍紹介

白川静没後十年記念出版

『対談 私の白川静』

編者 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所

著者

芳村弘道（立命館文学部教授・

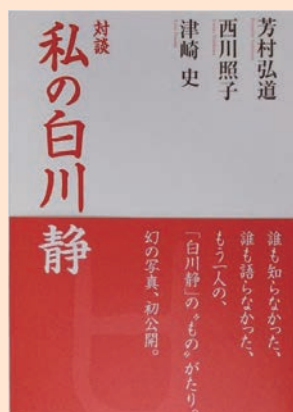
白川研副所長）

津崎 史（白川静 長女）

西川照子（編集者）

エディシオン・アルシーブ

二〇一七年一〇月三〇日



二〇一六年一〇月の「白川静先生を語る会」の対談を基に加筆、再校正したものです。誰も知らなかった、誰も語らなかった、白川静先生のものがたりです。未発表の写真も魅力です。



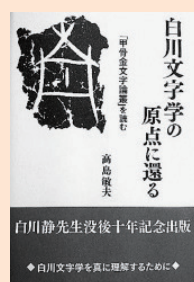
序章 「白川静」の掌に乗る―遊べ、遊べ、遊べ―
第一章 歌 白川静が歌う―神への申し文―
第二章 笑 白川静が笑う―親爺ギャグ―
第三章 神 白川静が恋う―母恋し―
第四章 口 白川静が書く―ト文・金文―
第五章 遊 白川静が楽しむ―「孤独」の喜び―
終章 白川静先生を想う―桂東の教え―

高島敏夫 著

『白川文字学の原点に還る』

『甲骨金文学論叢』を読む』

（朋友書店 二〇一六年八月）



萩原正樹 編

『森川竹磬』詞律大成』本文と解題』

（立命館大学文学部人文学研究叢書7）

風間書房 二〇一六年三月



萩原正樹 著

『詞譜』及び森川竹磬に関する研究』

（中国藝文研究会 朋友書店二〇一七年三月）



佐藤信弥 著

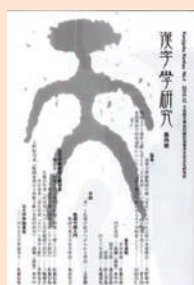
『周一理想化された古代王朝』

（中公新書 二〇一六年九月）

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編
漢字学研究 第四號

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所

二〇一六年二月）



立命館白川静記念

東洋文字文化研究所紀要第十號

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 二〇一七年三月）

